

## 第4章 天草の人口問題

董 振 江

### はじめに

一般に、島という地理的に隔離された地域は、特別な自然環境や独特な生物などがよく見られる。そして、島の人々は独自の生産方式や、他の社会と異なった独自の文化を持つこともよく知られる。日本もその例外なく、本州など中心地帯を標準だと位置付けると、南西諸島をはじめ、九州周辺の対馬、壱岐、五島列島などの島々もかなり異なった独自の文化を持っている。とりわけ、これらの島々の中では、キリスト教の伝来という特徴がある。本章がこれから述べる天草の地域文化と社会構造は日本においてもさらに特別な存在となった。五島列島は人口が少ないため、大正から昭和にかけて外部からの移住を歓迎していた。それとは対照的に、天草においては江戸時代の万治から慶応年間（1658－1868）に至る200年ほどの間に人口は10倍に増えた。これは人口過剰による深刻な人口問題になった。近世において天草の社会、経済、文化の諸問題を考える際は、人口爆発という背景も重視しなければならない。

本章は近世まで天草の歴史を遡って、人口推移・人口爆発の経緯と、それによって巻き起こる地域社会へのいろいろな影響を考えたい。とりわけ、2010年7月の現地調査に基づいて、天草における人口爆発の社会的原因と人口増加を生み出す自然環境（農業・漁業の自然条件）、という二つの側面から人口問題を読み解こうとする試みである。また、天草の人口問題を例として、世界の各地域（特に開発途上国の中では、アフリカ北部のイスラム教地域）における人口問題の解決への参考になればと考えている。

### 近世天草における人口推移と人口爆発

前近代の天草諸島は、自給自足の農業社会であった。山地が多く、大きな平野がないため、人口密度は日本の中でも格別に高くはなかった。しかし、海外との貿易を契機として、キリスト教の伝道が行われた後、天草は日本の歴史上において重要で、特別な意味を持つ地域になった。キリスト教の現地化が創出したキリシタンは天草住民の生活に独自の気質を形成させた。結局、寛永14－15年（1637－38）島原の乱が起きて、人口は半減することになった。天下の耳目を聳動した島原の乱直後は、社会生産と秩序を回復させるため、天草の名代官、鈴木重成の「天草亡所開発仕置」による村落再編が行われた。近隣地域からの移民導入によって進められる政策で、寛永19年（1642）、幕府は近隣の諸領から、一万石につき一戸の割合で強制移民を行わせた。これにより、天草には薩摩から30戸155人、肥後から170人が強制移住をさせられる。

その後、天草には周辺地域から浪人をはじめ、移住者が多く流入してきた。また、幕府直轄領となっ

たことで、流罪地に指定され、多くの流人が送り込まれてきたことや、宗門改めの制度によって転出が比較的困難であったことなどの理由で人口は徐々に増加した。この時期の正確な統計はないが、万治2年（1659）の全島検地の完成によって天草の人口は約16000人に過ぎなかったとされる。

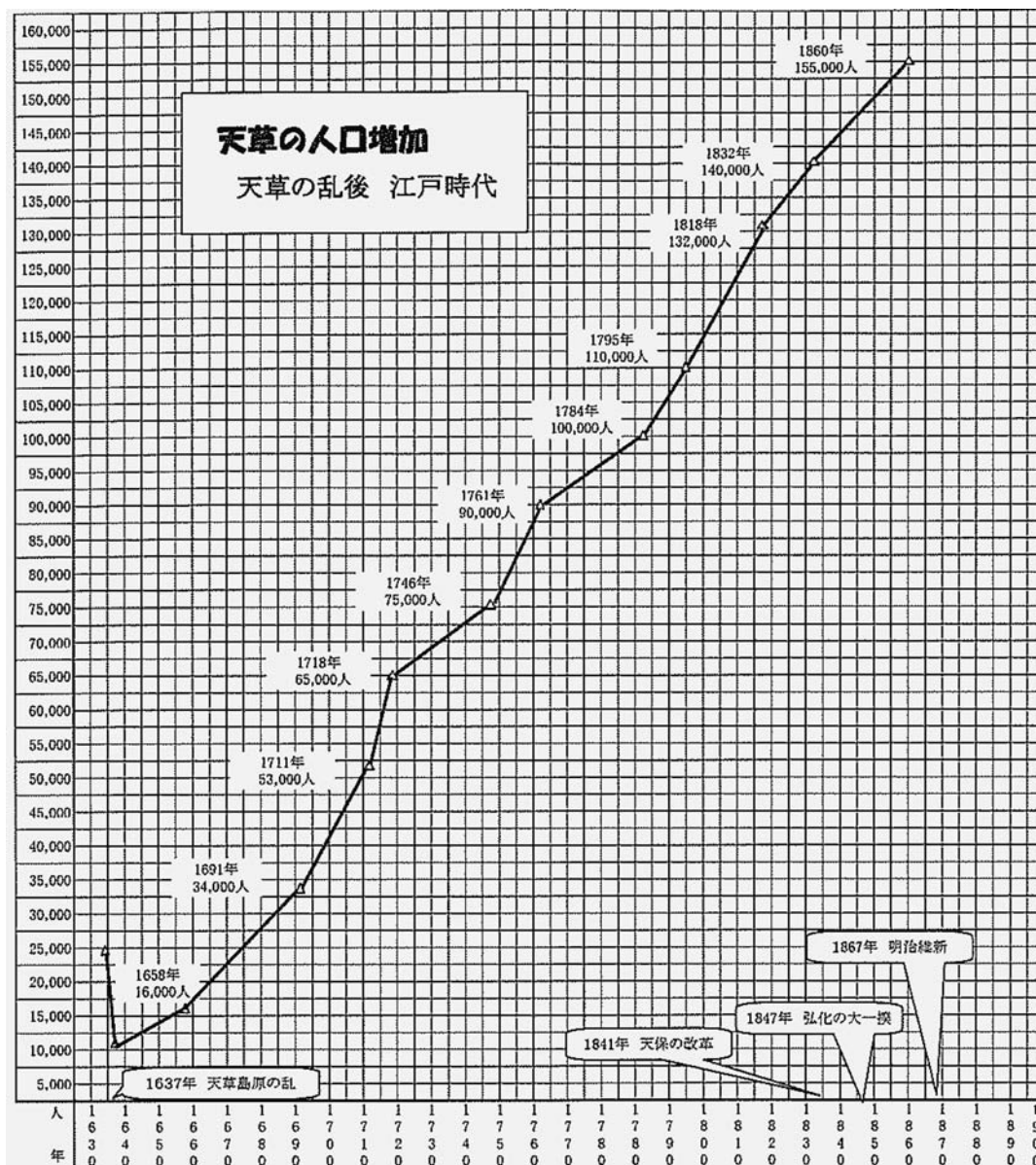
表1 天草の人口推移

年次	人口	出典
1643	5000	『天草郡記録』
1659	16000	『万治元戌年より延享三年迄の人高覚』
1684	31000	『万治元戌年より延享三年迄の人高覚』
1691	34357	『天草島中人高帳』
1717	65000	『年表記録』
1746	74657	『万治元戌年より延享三年迄の人高覚』
1761	89982	『年表記録』
1794	112000	『年表記録』
1804	140446	『伝聞書』
1805	122298	『高浜村「村鑑」』
1806	123892	『高浜村「村鑑」』
1810	128244	『天草郡村々高小物成高諸役人附』
1817	132205	『天草郡総人高帳』
1826	142782	『天草郡総人高帳』
1827	139041	『天草郡総人高帳』
1829	141588	『天草郡総人高帳』
1832	143041	『天草郡高揃井籠寄帳』
1867	156186	『天草案内』
1885	168221	『天草案内』
1909	193498	『天草案内』
1924	195344	『天草案内』

島原の乱直後は主に移民による人口回復であったが、天草の生産増加と秩序の回復によって、万治2年（1659）から元禄4年（1691）までの32年間で、人口は倍増して34357人になった。その後は自然増加がすすみ、延享3年（1746）には74650人、百姓相続仕法発布前後の寛政6年（1794）には112000人となった。そして、天保3年（1832）には143041人になっている。この趨勢はさらに慶応4年（1868）156161人、大正13年（1924）195344人と倍増の数字を描くのである。

つまり、天草の人口は、万治から慶応に至る200年間で10倍に増えたという爆発的な人口増加の時期があった。この時期の天草における人口爆発の現象は、全国的に見た場合、むしろ人口停滞を続けていたといわれる18～19世紀前半においては、特異な現象であった。

表2 近世天草の人口グラフ



### 天草人の出稼ぎ

天草のような地理的には離島となる地域で、人口の激増は続いたが、最初の段階から人口過剰に悩んでいたわけでもない。島原の乱直後の人口が少ない時期においては、労働力の増加も期待されたし、食糧生産も大幅に増加させていた。いわば社会全体は経済的に繁栄した時期であった。しかし、この時期に増加した人口は、地域全体の人口基数をどんどん拡大した。そして、この地域では新しい土地開発ができず、農業技術の革新が進まない状態で、島内の食糧増産はこれ以上拡大することが不可能になる。それは天草社会の自給自足体制が維持できなくなることを意味した。

自給自足のバランスが崩れると、外部から食糧を買う必要が生じる。一方、明治維新以降は資本主義

経済の発展によって社会経済構造の変革に大きな影響を与えた。資本主義発展の一つの条件として、農業生産に課せられる地租の金納化が行われる。天草の人々は食糧を買う、もしくは地租を納入するため、農業も食糧生産から養蚕業のような換金業種に転換しなければならない。しかしながら、人口増加が止まらなると、食糧の自給率はさらに低下する。このように天草の社会経済はさらに換金業種に依存するという悪循環に陥る。

表3 天草農産物の栽培面積の推移 (単位：町)

	粟	大豆	桑園	甘藷	合計
明治20～23 (1887～1891)	300	400	25	3500	4225
明治31～33 (1898～1900)	500	700	60	9000	10260
明治41～43 (1908～1910)	600	700	300	8000	9600
大正7～9 (1918～1920)	600	700	300	7500	8100
昭和3～5 (1928～1930)	300	500	1200	6000	8000
昭和13～15 (1938～1940)	300	400	1200	5500	7400

こうした天草の人口爆発は、島外で出稼ぎすることによって、外部からお金を持ち帰ることを余儀なくされた。近世から明治以降にかけて、天草は出稼ぎ労働者の輩出地で有名となり、また「からゆきさん」の名によってよく知られた海外出稼女性の主な出身地であった原因にもなる。

### 天草の人口爆発とキリシタン

江戸時代の日本では出生率が高く、産まれる子供の数も多かった時期があった。しかし江戸時代後期になると、日本は全体的に人口が停滞した。その理由の一つに、「間引き」(まびき)という風習があったと考えられる。貧しさから起こるものではなく、生活水準を保つために行われていた社会現象である。一方、同じ時期の中国は最後の王朝である清の時代に統一的な政権が生まれ、総合的な政策が打たれることで、生活が改善されることになった。中国の伝統文化は「多子多福」(子ども多ければ多いほど福が大きい)という考えが強いから、人口の増加が非常に速い。しかし、新しい土地の開発はほとんどできず、人口と生産のバランスがやがてずれ始めた。それによる農民の貧困がますます深刻化して、自然災害と飢饉が発生する大きな社会問題が存在した。

中国と違って、天草の人口増加は、社会組織の変遷に深い関連がある。永禄9年(1566)アルメイダの伝教以降、天草島は島原半島とともに、キリスト教が庶民の生活に浸透した。島原の乱が起きて、天草の人口は半減したが、実際にキリスト教の信仰は変わらず、「隠れキリシタン」と呼ばれる状況になった。この「隠れキリシタン」の人々は表面的に自分はキリシタンであることを否定するが、実際には自



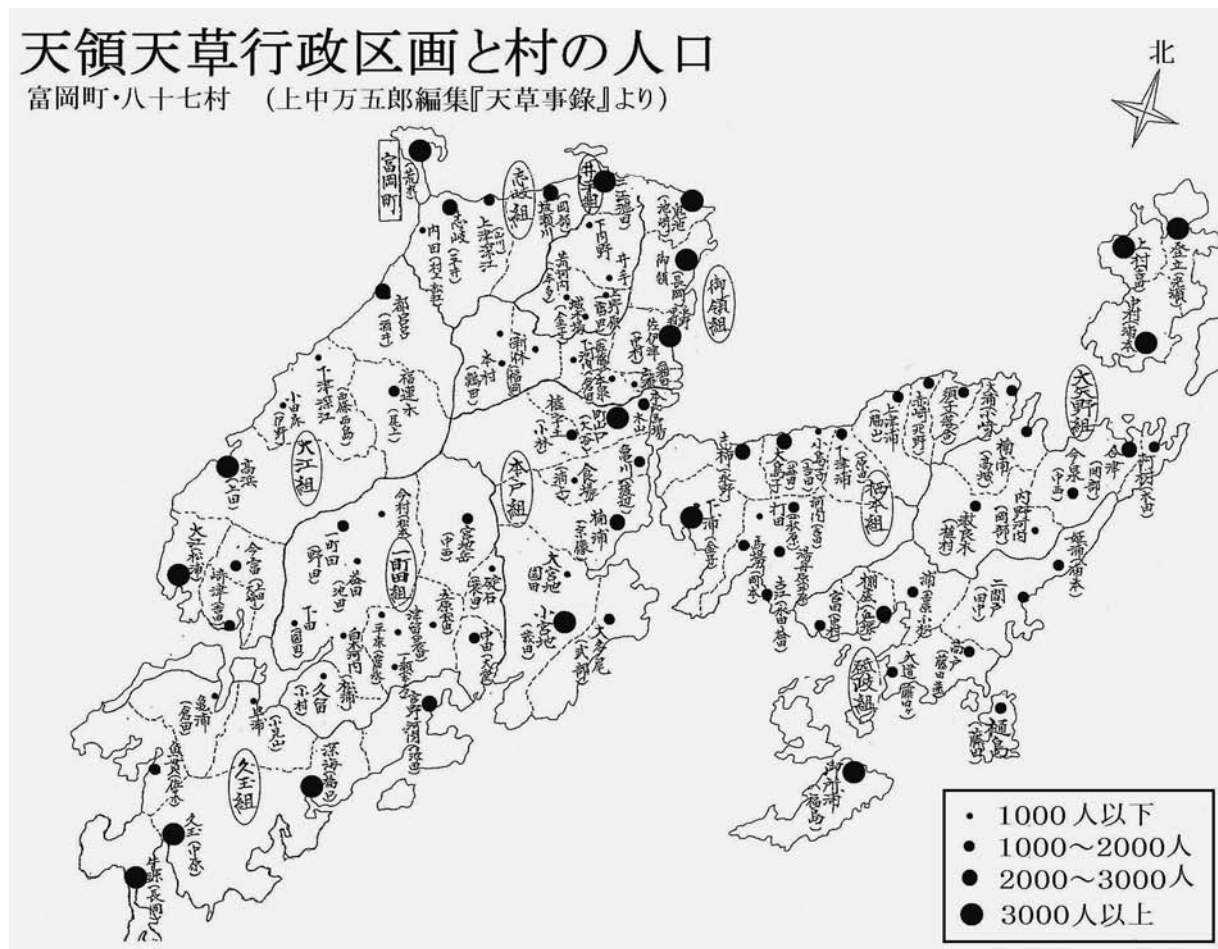
分の生活においてキリスト教の教義を守っていた。その教義の一つは妊娠中絶と「間引き」のような行為を禁止しているため、その結果として天草は日本の中では最も著しい人口爆発地帯となった。

### 人口増加と社会経済構造

九州周辺の島々では、天草のみ人口爆発の社会問題が起きた。その原因を考えるとキリスト教の影響のほかに、天草の社会経済構造を分析し、そして他の地域と比べることも必要である。近世天草の経済構造は、農業生産と漁業生産に分けられる、これは同じ九州周辺の島々と同じであり、何も天草が特別ではない。しかし、住民全体の経済基礎は半農半漁であるか、または農民と漁民に分けているのか。その違いは、島全体の社会構造に大きな影響を与える。そこで、九州の北西部に位置する壱岐島と比較してみたい。

壱岐島の場合、漁業集落の人は農業集落のことを指して「田舎」と呼ぶ、つまり農業をやっている農業集落の人より、自分たち漁業をやっている人のほうが優位であるという感覚が意識されている。一方、農業集落の人は、漁業集落の人を「気性が荒い」という評価をしていて、これは一般的な意識である。

図1



このように互いに差別意識を持っているから、農業集落では農民同士、漁業集落では漁民同士で結婚し、双方の婚姻交流はほとんどなかった。島の人口はもともと少ないから、それにつけて漁業集落と農業集落がさらに通婚を拒否すれば、人口増加の障害になる。

一方、経済面では、漁業集落の収入は単純に漁獲物に頼む状態だ。漁業はわずかな契機で大儲けすることもあれば、漁獲が無く無収入のこともあるから、日常の生活は絶えず漁獲量に左右されて不安定である。農業集落は毎年同じような農耕を行えば、比較的安定した収穫と収入を得られる。いずれにせよ、農業集落と漁業集落の間では、食糧の交換が必要である。

天草の場合は、島全体が大きな半農半漁地域であり、農業生産と漁業生産の両方を合わせて島民の生活を支える。食糧の流通には支障がないから、農業の安定性は島全体の食糧基盤になる。生産力の高い漁業は、住民に必要なタンパク質を提供することができて、バランスの取れた食生活は人口増加の重要な要因となる。また、壱岐のような漁民と農民の対立がないので、双方の婚姻関係が結びつきやすい点も人口が増加しやすい理由である。

### 食糧基盤

天草の人口が激増するのは、当然社会的な原因として重要である。しかし、それを支える食糧の生産は実際、何よりも重要な客観条件である。天草では自給自足の農業生産が人々の生活基盤である。換金作物としての甘蔗は、文政元年（1818）以来幾度となく制限されたため収入が少なく、全体的に外部から食糧を大量に買う可能性が低い。このような農業社会は、人口増加と同時に食糧の生産量も増加させなければならない。天草において人口が持続的に増加したため、食糧の生産も高いペースで増加していたはずだ。天草の地理的環境から考えると、農業生産はもちろん重要であるが、漁業による食糧の提供も非常に重要である。

### 天草の農業

九州の南西部に位置する天草は、気候が温暖であるという点で、農業生産にはとてもいい条件であるが、山地と丘陵が多くて、これらが島全体の七割を占める。また、山地と丘陵の地質・地形が複雑で、耕地の開発は難しい。加えてそれぞれの農地は規模が小さく、分布は零細である。耕地は全体的に表土が浅く、瘠薄なる粘土質が多くて、土壌の生産力レベルはとても低い状態にある。天草は降水が多いが、農業地帯の地質は扇状地が多く、地層の保水力が低く、降水がほとんど海に流れるため、灌漑用水の不足も大きな問題である。このような土壌条件は、農耕する際に、深耕が不可能である。そのうえ、水不足から、日本の伝統的な稲作農業を発展させるのはとても難しい。

このような農業条件では、大量に増加していた人口を支えるのは不可能である。また、人口が増えると、住宅地の占用も広がるから、良い農地も減少させることになる。より広い農地を開拓するため、天草の人々は高い山の急斜面でも段畑や棚田を造成し続けていた。

天草においては、一人当たりの農地面積が狭いので、多くの食糧を生産するため、土地の生産力を高くしなければならない。このような自然条件に応じて、天草の住民は稲作ではなく、生育期間が短く、



（写真1）急斜面で開発した棚田（近世では甘藷を植える段畑）  
 熊本県天草市倉岳町棚底地区（2010年7月26日筆者撮影）

単位面積の生産量が高い、土壌の生産力へ要求が低い、とされる甘藷類作物を主な作物として栽培した。甘藷の耕作面積は明治20年（1887）から同23年までは平均で3500町だったが、明治31年（1898）から同33年の間に平均9000町に広がっていた。

人々の生活を支えるには漁業が大変重要な役割を持つ。図1が示すように、天草には富岡町と87ヵ村がある。そのうち海から離れて、主に農業だけに従事する村は37ヵ村で、50ぐらいの村々は半農半漁である。村々の人口数を見ると、人口3000人以上の村はすべて半農半漁村である。また、人口が多い村の中で牛深、大江など農業より漁業を中心とした村もあった。そして、天草の一人当たりの漁獲量は熊本県の中で一番高かった。

表4 熊本県郡別漁獲高 (単位：円)

	天草	八代	玉名	宇土	葦北	飽託	球磨
大正四年 (1915)	801,237	110,466	105,189	97,685	93,442	53,352	32,594
昭和六年 (1931)	1,372,128	264,253	145,237	184,491	157,411	229,110	76,035

（『熊本県統計書』より作成）

高い漁獲量が維持できるのは、天草周辺の豊かな海によるものである。そのうえ、島々に囲まれているから、近海は浅く、特にいわし漁はとても有利条件である。



(写真2) 天草島と周辺の島々で囲まれた近海漁場  
熊本県天草市倉岳町棚底地区 (2010年7月26日筆者撮影)

## まとめ

天草は万治から慶応に至る200年間に人口が10倍に増え、深刻な人口問題を起こしていた。人口爆発の結果、天草の人々は出稼ぎに行くことが一般的になった。そのため天草は出稼ぎ者の出身地として国内外から広く周知された。人口爆発の主な原因は島民にキリシタンと呼ばれるキリスト教の信者が多数存在したからである。それは宗教上、妊娠中絶と「間引き」のような行為を禁止されていたことにある。また、天草の社会は漁業と農業の分離がないから食糧の流通が円滑である。漁民と農民の間では対立もないから、婚姻関係を結びやすい。これらの理由で人口が増え続けた。一方、人口増加の前提条件としては、天草は甘藷を中心とした農業と豊かな海が住民の食生活を支えていった。

つまり、天草は社会の安定に加えて社会的対立もないため、人口と食糧生産の増加が同時にバランスを取れる状態であった。しかし、地域全体では新しい土地開発できず、農業技術の革新が進まない状態で、食糧の増産が不可能になると、自給自足の天草社会は崩れ始めた。これが深刻な人口問題になって、天草の社会全体に大きな影響を与えたのである。

## 参考文献：

- 上天草市史編纂委員会『上天草市史 大矢野町編4 天草の門』2007年  
中村正夫「徳川期天草島における出稼の諸相」『熊本大学教育学部紀要』5号、1957年  
中村正夫「天草村落の研究 — 近世における人口と社会 —」『熊本大学教育学部紀要』7号、1959年  
森 克己「天草の海外出稼女の研究」『九州文化史研究紀要』2号、1952年  
檜垣元吉「近世天草の人口問題とその背景」『九州文化史研究紀要』2号、1952年  
桑畑美沙子ほか「天草における1930年代の芋食文化」『熊本大学教育学部紀要』39、1990年